

新たな移動サービス MaaSの現状と今後

特集1



日本産 MaaS の特徴と現状

牧村 和彦 Makimura Kazuhiko

一般財団法人計量計画研究所理事 東京大学博士(工学) 神戸大学客員教授
将来のモビリティビジョンを描くスペシャリストとして活動中。著書に、
『MaaSが都市を変える 移動×都市DXの最前線』(学芸出版社、2021年。
第12回不動産協会賞受賞)ほか多数



はじめに

モビリティ新時代の本命といわれ、世界中で話題となっている「MaaS(マース)：Mobility as a Service」。MaaSとは、従来の自家用車や自転車などの交通手段をモノで提供するのではなく、サービスとして提供する概念です。「あなたのポケットに^{すべて}全ての交通を」というキャッチフレーズは世界中で共感を呼び、スマートフォン1つでルート探索から予約、決済、発券までが行え、「移動の所有から利用へ」を1つのパッケージとして商品化した、究極の交通サービスが始まっています*1*2。

本稿では、MaaSとは何か、MaaSの本質を解説し、わが国で社会実装されてきている先進的な取組を通し、日本産 MaaS の特徴を紹介します。

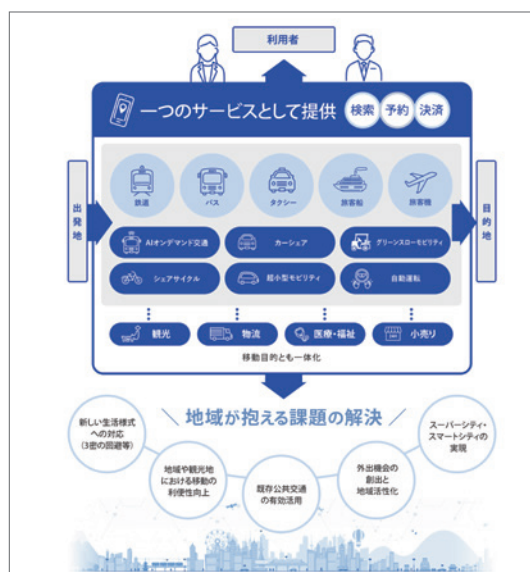
MaaSの本質

MaaSは、決して便利なアプリを開発することだけが目的ではありません。自動運転やカーシェアリング、配車サービスなど個別の新しい移動サービスの概念でもありません。MaaSとは自動車という伝統的な交通手段に加えて、新たな選択肢を提供し、自家用車という魅力的な

移動手段と同等か、それ以上に魅力的な移動サービスを創出し、安全で持続可能な社会を構築していこうという全く新しい価値観やライフスタイルを創出していく概念です。

気候危機への対応は待たなしであり、世界では毎年約130万人が自動車による交通事故で亡くなっています。今後も増え続ける「買い物難民」への対応、縮小する交通産業の再生、マイカー保有と非保有者との移動格差の是正など、さまざまな問題が顕在化しています。これら社会問題に対し、新しい移動サービスを育成し、

図1 MaaSとは



出典：国土交通省ウェブサイト「日本版MaaSの推進」

*1 牧村和彦『MaaSが都市を変える 移動×都市DXの最前線』(学芸出版社、2021年)

*2 中村文彦・外山友里絵・牧村和彦『図解ポケット新時代の移動革命！ MaaSがよくわかる本』(秀和システム、2022年)

既存の交通手段との連携、再生を促進していくMaaSが、1つの解決策として期待され、世界中で様々な挑戦が始まっています。

100年以上の歴史を誇る世界最大の交通事業者連合組織「UITP (Union Internationale des Transports Publics: 国際公共交通連合)」では、MaaSを次のように定義しています*3。

MaaSとは、さまざまな移動サービス(公共交通機関、ライドシェアリング、カーシェアリング、自転車シェアリング、電動キックボードシェアリング、タクシー、レンタカー、ライドヘイリングなど)を統合し、これらにアクセスできるようにするものであり、その前提として、マイクロモビリティ(小さい交通)に代表されるようなアクティブな交通手段と効率的な公共交通システムがなければなりません。このオーダーメイドなサービスは、利用者の移動ニーズに基づいて最適な解決策を提案します。MaaSはいつでも利用でき、計画、予約、決済、経路情報を統合した機能を提供し、自動車を保有していなくても容易に移動、生活できるようにするものです。

定義だけに縛られることなく、MaaSの本質を理解しておくことが大切です。

● 日本産 MaaS の先進的な取組

移動と他産業の掛け算は日本の伝統的なお家芸であり、古くは鉄道の沿線開発がその代表例です。鉄道沿線に、住宅、商業、観光やレジャー施設などを開発し、沿線の価値向上を進めてきました。今や交通事業者によっては交通部門の売り上げは全体の1割程度という企業も現れているほどです。様々な産業がデジタル化していくなかで、移動と他産業とのデジタルを通じた重ね掛けによる“お出かけ”を支援するサービスが日本各地で社会実装してきています。

例えばトヨタファイナンシャルサービス(株)は、「my route(マイルート)」というブランド名でMaaSのプラットフォームを2019年11月から展開している先進例です*4。自動車会社

と交通事業者がタッグを組み、1つのサービス(as a Service)を社会実装しています。マイルートは福岡を皮切りに、北九州、横浜、愛知、富山、長崎、由布院(大分)、宮崎、熊本、沖縄など、大都市から地方都市まで、わずか4年で全国各地に広がってきました。これらサービスは、移動サービスと商業、イベント、観光などと連携している点が特徴であり、“お出かけ”を促進する工夫が随所に見られます。

例えば、福岡や宮崎では買い物付きバス乗車券をデジタルチケットとして販売、富山では、地元の飲食店と連携したクーポンサービス、由布院では、バスや鉄道のチケットに付帯した地域のお得なクーポンサービスなど、地域ごとにアプリをダウンロードすることなく、地域オリジナルのサービスが提供されています。鉄道や路線バスだけではなく、カーシェアリングや高速バスなどと組み合わせた利用も可能であり、移動総量を増やしていく取組が地域に浸透している好例です。

また、広域の連携も始まっています。関西エリアには、交通事業者ごとにアプリが存在しており、来年(2025年)開催予定の大阪・関西万博での移動サービスの先駆けとして、民間交通事業者7社が連携し、ワンリージョン(1つの地域)のビジョンの下、「KANSAI MaaS」を2023年9月からスタートしています*5。この

図2 広域連携による日本産MaaS



出典：一般財団法人関西観光本部ウェブサイト

*3 前掲注*1 *4 トヨタファイナンシャルサービス株式会社「myroute公式ウェブサイト」<https://top.myroute.fun>

*5 記者発表「KANSAI MaaSアプリのリリースについて～国内初の鉄道事業者連携による広域型MaaSアプリが始動！～」(2023年9月5日)

7社を含む、80社局の事業者が参加する関西MaaS協議会が推進母体であり、近畿2府5県(大阪府、京都府、兵庫県、奈良県、和歌山県、滋賀県、三重県)ならびに愛知県の一部を対象とした取組も注目です。同様に九州エリア全体を対象とした広域なMaaSの実装も準備中であり、1つのサービス(as a Service)として国民の皆さんの移動の伴走となり、新しい移動体験を創出する取組が広がっています。

● 移動の価値を創出する新しい動き

気候危機への対応、事故とは無縁な世界の実現(ビジョンゼロ)のため、デジタル技術を最大限活用したMaaSが続々と誕生しています。パンデミック後の新たなライフスタイル、新たな移動の価値を創造していく果敢なチャレンジが全国各地で行われており、その一端をご紹介します。

西日本旅客鉄道(株)(以下、JR西日本)が取り組んでいる「サイコロきっぷ」はその代表例の1つです(図3)*6。JR西日本が推進する「WESTER(ウエスター)」はサービス開始から200万ダウンロードを超え、世界中のMaaSダウンロード数でも、世界ベスト5に入るといってよいほどの快挙を続けています。その推進役の1つであるサイコロきっぷは、あっという間に売り切れるヒット商品です。2024年2月28日終了の26,000組限定として発売されていた大阪駅発サイコロきっぷの場合、平日月曜日から木曜日、大阪発では最大83.3%割引、5,000円で金沢、呉、出雲市、博多のいずれかの区間内を往復利用ができるもので、各方面(利用区間)の確率は、「金沢」は1/3、「呉」は1/3、「出雲市」は2/9、「博多」は1/9と事前に周知されます。その行き先は、サイコロを振って目的地が決まるため、ゲーム感覚の企画商品として好評です。

利用期間を、2024年1月8日(月・祝)～2024年2月29日(木)の連続する2日間としていることからもお分かりのように、閑散時期への需要を喚起し、列車の乗車率向上も期待できるデジタルならではの仕組みが特徴です。利用者も3人までエントリーできるため、仲間同士の新しいコミュニケーションのきっかけとしても興味深い取組です。なお、今回のサイコロきっぷは2023年10月に終了したサイコロきっぷ(40,000組限定)の抽選に当選しなかった人限定の発売となっています。

5,000円には、観光地でのお得な特典なども含まれており、さらには、JR西日本が地域で展開するご当地MaaSの「tabiwa(タビワ)」とも連携しています。金沢の場合、能登方面のお得な乗り放題きっぷである金沢能登tabiwaパスや富山県の世界遺産五箇山等へのお出かけにお勧めな南砺金沢フリーパスがタビワから購入可能です。サイコロきっぷのお得な商品の中にはレンタカーも含まれ、また、金沢ではJR西日本が運営するホテル送迎専用のデマンド交通も期間限定で始まっています。このデマンド交通は、ウエスターと連携し定額運賃の定時運行型(11時台～15時台までに4便定時出発する)で金沢駅から香林坊周辺のホテル間を送迎するものです。

図3 サイコロきっぷ

このようにサイコロきっぷは定額制のサービスと地域ごとの定額制及び従量制のサービスを利用者が上手に選択できるように設計されており、扱



出典: JR西日本「アオタビ」

*6 牧村和彦「新種MaaSが続々誕生 新たなキーワードは「寄り道」である」【連載】牧村和彦博士の移動X都市のDX最前線(19) Merkmal (2024年2月2日) https://merkmal-biz.jp/post/57526#google_vignette

点間のスムーズな移動と拠点内での周遊を促進する仕掛けと、ピーク需要を分散し、オフピークでの需要喚起にも資するといった、デジタルで新たな移動価値を創出していく次世代の交通サービスです。

MaaSというとスムーズな移動や移動のペインポイント^{*7}の解消が注目されがちであるものの、一方で寄り道を促し、まちづくりと一体となった取組も始まっています。

チケット販売大手のぴあ(株)は、Jリーグ観戦に新しい移動の価値を提供する取組を始めています。キャッチフレーズは「ユニフォームを着て旅に出かけよう」、サービス名称を「ユニタビ」とし、コンセプトも極めて明瞭です^{*8}。

好きなチームの「ユニフォーム」を着て、みんなで応援をするからチームとの一体感が生まれて観戦が楽しくなる。1日を「旅」と捉えて、試合の前後もユニフォームを着て、街を歩き、食事を楽しめば、楽しい時間をもっと伸びるはず。ユニタビは、観戦・旅のお供となり、サッカー観戦の1日を存分に楽しめる新しい体験を提供します。

サッカー観戦のお供に「ユニタビ」アプリを携えれば、これまでのスタジアムを往復するだけの移動体験から、スタジアム周辺地域の人やまちとの出会いを生み、交流人口や地域創生を促すといったデジタルで“寄り道”を促す注目の取組です。

スタジアム周辺の地域資源や観光資源を観戦者向けに提供するとともに、スタジアム周辺への寄り道を促すべく、シャトルバスの運行やOpenStreet(株)が展開するシェアサイクルサービス「HELLO CYCLING(ハローサイクリング)」との連携も進められており、地域を巡る足とスポーツイベントの新たな共創が生まれています。

また、オープンファクトリーとファクトリー間の移動を地域一体で支援する“寄り道MaaS”

がいくつかの地域で始まっており、新たな展開をみせています。オープンファクトリーとは、ものづくり企業が生産現場を外部に公開したり、来場者にもものづくりを体験したりしてもらう取組であり、近年は企業単独ではなく、地域内の企業等が面として集まり、地域を一体的に見せていく「地域一体型オープンファクトリー」に進化してきています。

例えば福井県の鯖江市・越前市・越前町全域で開催されるオープンファクトリー「RENEW(リニュー)」は、毎年大規模なイベントを開催しており2023年で9年目を迎えた先進例です。越前の漆器、和紙、打刃物、^{たんす}箆笥、焼き物といった伝統的工芸品や、眼鏡、繊維といった地場産業が半径10km圏内に集積しており、越前地域のファクトリーを巡る2022年10月の3日間のイベントには4万人近くの来場者があったそうです。

地方都市でのイベント開催の場合、マイカー以外の来場者の足の確保が課題です。2023年のイベントでは、RYDE(株)のMaaSアプリ「RYDE PASS」からお得なタクシー利用券が購入できたり、レンタサイクルを借りることができるなど、オープンファクトリーを巡る移動の足の確保やデジタル化も合わせて取り組んでおり注目されます。

福井以外にも昨年(2023年)香川県東部地域で開催された体験型イベント「CRASSO(クラッソ)」では、オープンファクトリーを巡るための足として、無料のデマンド型交通CRASSO号を提供する取組も始まっています。

● おわりに

本稿で紹介した取組以外にも全国各地で様々な「ご当地MaaS」が社会実装されています。“お出かけ”のお供として、新しい移動体験に触れてみてはいかがでしょうか。

*7 消費者が、お金をかけてでも解決したいと思っている悩みや課題のこと

*8 ぴあ株式会社「ユニタビ公式ウェブサイト」<https://site.uni-tabijp/>